

外傷後認知の時系列的変化と症状・個人差要因との関連 —トラウマフィルムパラダイムと経験サンプリング法による測定—

ML16-7003J 菊池 羽音

本研究に参加いただきありがとうございます。参加いただいた方へのフィードバックとして、本研究の目的と結果から得られたことについて、以下に簡潔に記載いたします。以下の内容に関して、疑問点やより詳細な説明についてご興味がありましたら、指導教員の国里愛彦までお問い合わせください。

問題・目的

外傷後ストレス障害 (Post-traumatic Stress Disorder, 以下 PTSD) の発症・維持要因として、外傷体験やその症状に対して過度に否定的な認知(外傷後認知)が重要だとされています。しかし、外傷後認知がどのように変化するかについては、詳しい調査がなされていません。またその変化にその人の持つ個人差要因(自閉スペクトラム傾向と感覚過敏性傾向)がそのように影響するかも検討されていません。そのため、本研究では外傷後認知の詳細な時系列的変化について、大学生を対象にトラウマフィルムパラダイム(ストレス喚起映像を用いた実験課題)と経験サンプリング法(スマートフォン等を用いて日常的に質問に答えてもらう方法)を用いて検討を行いました。

方法

大学生 50 名を対象に、パソコン画面に呈示されたストレス喚起映像を視聴してもらう課題、課題のネガティブな影響を測定する尺度を含む質問紙調査、動画視聴課題によって惹起されたネガティブな認知を測定する経験サンプリング法による調査を実施しました。

結果・考察

本研究で用いたストレス喚起映像を視聴してもらう課題は、実験実施一週間後において実験群の PTSD 症状を高めましたが、外傷後認知の推移に関しては影響が検出されませんでした。外傷後認知の推移に関して詳しい検討を行ったところ、多くの認知項目で回答日が進むにつれて得点は減少していきませんが、回答日が進んでも減少があまり見られない認知項目もありました。また初期の認知がよりネガティブだと、その後の修正が難しくなる傾向がみられました。さらに、個人差得点が高いと認知がネガティブになりやすく、認知の修正に時間がかかる傾向がみられました。